



玉出はんなり亭 満員御礼



高座と一門トークショー



玉出はんなり亭 正面



←五代目師匠のまねき
ちようちん↑



五代目文枝の碑
(大阪高津宮)



優勝



幕下優勝
幕下優勝で十両昇進を
決めた一意虎風関



繁昌亭にて
華やかな女流ウィーク



芸歴65年を超えた名人福団治師
兄弟分の盃かわしている文福



六代文枝師、福団治師に囲まれる
三代目露の五郎師



繁昌亭での米朝師生誕百年公演
のロビーに飾られた師匠の胸像と
孫弟子の鞠輔さん

桂ちようば改め、桂米之助襲名披露チラシ

桂ちようば改め四代目桂米之助
～襲名披露・先代の地元若江岩田公廣～
令和8年2月1日(日) 昼2時～
近鉄奈良線若江岩田駅前
希楽里ビル6階 イコーラム
TEL072(960)9201
前売り2500円 当日3000円

三味線 はやしや様
・囃り物 桂雪彦
企画・演出 (有)文福らくごプロモーション
「ふもろ」が専任・文福一注 TEL0743-73-6663
協力 (株)米朝事務所

いちもん新聞

五代目桂文枝

発行

いちもん新聞編集部

〒630-0246 生駒市西松ヶ丘8-8

「いこまのたぬき小屋」内

(有)文福らくごプロモーション

TEL・FAX 0743-73-6663

桂 文福

ホームページ 文福部屋

YouTube「たぬき小屋から福もろ亭」

令和8年1月 第131号

○繁昌亭20年の節目の年

「天満天神繁昌亭」が、今年9月で丸20年を迎える。当時、上方落語協会の会長（三枝時代）の六代文枝、今は協会の特別顧問、四代小文枝、文珍は相談役、理事にも文福、文也、枝女太、慶枝、文華と一門も繁昌亭運営に力をそそぎ、仁智会長、米団治副会長を支えている。この一年、ユニークな企画もどんどん催される繁昌亭。さらに、開席八年目を迎える「新開地喜楽館」もよろしゅうお願い致します。

○玉出はんなり亭第一回大盛況

昨年3月で没後20年の五代目文枝、昨春にはおかみさんも天に召され、西成区玉出の親父宅にも足が遠のくこともあり、一門の集いの場になればと文福が発案し、師匠ご夫妻と同居の次男智之氏と力を合わせ玉出本通り商店街さんの集会場の「玉出フォーラム」をお借りして、師匠の写真やまねきを飾り二ヶ月に一回のわりで地域寄席「玉出はんなり亭」を開催。世間さまから、上芳らしい「はんなり」した芸風と評されたおやじらしい命名である。「こけらおとし」は五代目の実の孫の「小きん」「坊枝」「文福」と高座に上がり、一門トークショーでは枝女太、あやめ、鹿えもん、結女花が出てにぎやかに盛りあげた。玉出の町内会、師匠のご近所さんぐらいと思ってい

運んで下さり、大感激。いずれは「定席」をめざして、一門のたまり場となるよう、皆さんのご協力よろしくお願い致します。

○おたび寄席600回記念

今まで大阪の「田辺寄席」や神戸の「もとまち恋雅亭」など500回の会はあったが、なんと毎月開催で600回を迎えた「おたび寄席」。今から52年程前、当時の落語、講談の若年集団「ぐるうぶ寄席あつめ」2020年に天に召された四代目旭堂南陵（当時南右）さんを中心に文太、雀三郎（当時米治）、文福、文喬、仁福、吉朝（故人）、米八（故人）らが各地で地域寄席を担当、文福は和歌山の橋本市で「紀の川寄席」、文喬は「明石寄席」、文太は「田辺寄席」など、当時の東西交流で江戸の「若手花形落語会」の方々と共演。そのお方の中には現落語協会会長の柳家さん喬師、人間国宝五街道雲助師、今や大御所の鈴々舎馬桜師、入船亭扇遊師らすばらしい方々。時の流れを感じます。その「おたび寄席」は堺出身の四代目南陵師が担当され、堺市の「住吉宮御旅所」にちなんだ「おたび寄席」今も講談のお弟子達が受けつぎ、昨年暮れの記念公演では枝女太、坊枝、文福がゲストとして出演。大いにもりあげました。

○襲名 悲喜「も」も

昨年、露の団四郎師が三代目露の五郎を襲名、先代の怪談斬や大

阪にわかなど受け継ぎ、今年も各地で披露興行。又さこば師門下のちようば師が四代目桂米之助を襲名。三代目米之助師は人間国宝米朝師の兄弟子でユニークなのは、定年まで大阪市の交通局に勤めておられた。

戦後まもなく、我が師（五代目文枝）が交通局に入った時、「長谷川君、今上方落語界は風前の灯や君芸事好きやろ、わしと一緒に落語やろ」とさそって頂いたおかげで今の我々一門の斬家が存在するのです。その師匠は55才まで交通局と落語の両輪を歩まれましたが、定年パーティーすごかったです。片や大阪市の職員、一方で米朝師、春団治師、うちのおやじ、枝雀師、三枝師、さこば師、鶴瓶師ら錚々たる顔ぶれ。この師匠は

本名の矢倉悦夫から「悦ちゃん師匠」と多くの若手にしたわれ、長屋のもののしりの甚兵御さんを地で行くお方で米朝師も「わからん事あったら悦ちゃんに聞かや」。その師匠が東大阪若江岩田で昭和48年、地域寄席の草分け「岩田寄席」をはじめ米之助道場の門下生としてべかこ師（現南光）、春若師、米輔師、松葉師（没後七代目松鶴）、米太郎師（故人）そして文福がおせわになりました。先代は27年前に極楽寄席名人会に旅立たれましたがこの度の「ちようば改め米之助襲名披露」を岩田寄席の同人、文福がプロデュース、春若師の協力も得てなつかしい東大阪若江岩田での披露興行、先代のファミリィ達も地元の方々も大喜び。

そんなお祝いムードの中、我が一門で一昨年、四代目梅枝が誕

生。彼は「小つぶ」から「枝光」そして大名跡の梅枝を105年ぶりに継いだものの昨年2月、襲名披露興行中に酒気帯び運転の不幸事でその後の披露公演はすべて中止。本人は猛省し、現在奥様と二人で大阪、中津で居酒屋「ちんぶんかんぶん」を経営し、地道に小さな落語会からコツコツ再出発と決め、なんと芸名を若い頃に名乗った「小つぶ」にもどし、現点に立ち帰えり、がんばるとの決意。これは、本人から皆さまにお伝えをとという事であえて記事に……。皆さん、長い目で応援どうかよろしゅうお願い致します。

まめだの無口なたぬき

今日は休みだーやったー嬉しい。しかしやる事がいっぱいある。まずいちもん新聞の締め切りがあさつてなので今日書いてしまいたい。よし早起きして書くぞと5時に目覚ましを掛けたが2度寝3度寝で起きたのが8時すぎ、かぜが2、3週間治らないので病院にもいかねば、いきたくないが妻にきつく言われているので、なんとか耳鼻咽喉科へ、以外と空いていた。今年のカレンダー、手帳も買わねば、宝くじも買いたいが近くの売場は閉店になっていた。あーお腹も空いてきた。休みの日は早い。

文也の分野

ひょっとして何者かの指令を受けたのかと思うほど全国規模で熊

が山から餌を求め畑や果樹園を荒らし市街地に出没し、家の戸を開けいや自動ドアまで開けて室内に侵入し、上手に冷蔵庫まで開け滑走路を走って飛行機を止め民家に立て籠もりこの寒い中海を泳ぎ連日人を襲ってる。これこそ有事やろ日本の存立危機事態やろ。余計な事言うて危機煽るより、足元の熊さん有事に対処せよ!!

そんな中今日も熊一族は冬眠に備え餌を求めて人里へ出没しそして最後は緊急銃猟で撃ち殺さ……いや駆除されて短い一生を終える。ただな奴らも生きるために必死やったんやろなあと考えるとどこか悲しく胸が痛い。

それに最近猪も猿もぞくぞく里から街に出て来てないか。ひょっとして何か地球規模で動物達の一斉蜂起が起こる異変の予兆とちゃうか。そのうちこの星は「熊の惑星」になってしまうぞ!!

私たち中高年も散歩だウォーキングだと郊外の里山をのんきに歩いている場合やないで。熊や猪や猿やヘビやイタチやセアカゴケモやヤブに潜むダニや空中のトンビに襲われても知らんで。なので私は散歩・ウォーキングは、パンバン車の走る街中の幹線道路にします。排気ガスや交通事故のリスクと熊や猪に遭遇するリスクを較べたらはるかに熊の方がリスクいや。車の事故は保険金取れるけど熊は保険入っとらへんしな。だいたい世間もプーさんやくまモンを甘やかしている場合やないねん。何でもカワイイと言うてたらしまいに襲われるで。

白鹿のはくはくしかじか

私は能勢の手前の田舎暮らし。
最寄り駅前の自販機で缶コーヒーを買おうとした時のお話。私の後ろに腰が90度曲がったお婆さんが並んでいた。コーヒーを購入し立ち去ろうすると、「届かないから買ってもらえますか？」と言われ財布を渡された。確かに背が低い上に腰が曲がり切っているので、上の段の商品は届きそうにない。財布を受け取り、「分かりました！何にしますか？」と尋ねると、「あつさりした物を。」：いやはつきりした物をゆうてくれ。「お茶でいいですか？」「はいはい。」あたたかいお茶を買い、財布と一緒に渡すとお婆さん、急に大声で、「冷たい水が飲みたかった!!」と叫び、90度曲がった腰で、スタタタと走り去っていった。
その時のコーヒーは、とても苦かった。

文喬のぶんきょうチック

11月中旬、クマ騒動真つ只中の秋田に行った。飛行機は苦手なので東京乗り換えの秋田新幹線「こまち」に乗り。大阪から秋田まで約七時間くらいかった。仙台、盛岡間は日本一早いと言われている時速350キロで走行。快適である。ところが、盛岡を過ぎて暫くすると急にスピードが落ちた。落ちて当然、いつのまにか単線になっている。天下の新幹線が単線？単線なので、行き違えの電車待ちもある。上りの「こまち」待ちかなと思つたら、たった一両だけのワン

マンカーに新幹線が待たされている。どういうこっちゃ。挙句の果て、大曲駅でスイッチバックして進行方向と逆になった。新幹線のブライドはないんかい。

泊まりなのでまずチェックインしようとするもホテルの入口の自動ドアが開かない。足で二、三回バタバタしても一向に開かない。中からフロントの方がドアを手でこじ開けてくれた「自動にするとかマが入ってくるので電源を切っているんです。」なるほど。

落語をしているとお客さんが笑う度に体が揺れてクマ除けの鈴があつちでもチリンチリンこつちでもチリンチリンと鳴っている。司会の方が見かねて、お客さんに注意しに行ってくれたのはいいんですが、司会者も歩くたびにクマ除けの鈴がチリンチリン。その時のネタがチリンとてちん。これはウソでっせ。

枝女太の「和」のころ

言葉の話しその四。
今から三十年ほど前、放送で使う言葉にあまりにも気を遣いすぎたため放送に携わる者が委縮しまくった時期がありました。重箱のすみを突くように徹底的にたたかれる、いわゆる言葉狩りです。
放送禁止用語は法律で決められているものではありません。放送局や発信者側のあくまで自主規制です。自主規制だからよけいに委縮してしまっただけでしょうね。
「百姓」「芸人」までNGといわれました。百姓は農家の方、芸人は芸能人と言ひ換えるようにと。

私らもいわれたとおりにしていました。アホでしたね。ホンマにアホでした。

仁鶴師匠のネタで「最近は何貧乏人という言葉を使うとあかんそうで。ちゃんと言い換えがあつて、低額所得者と言うんやそうで、ちよつと聞いたらどこの金持ちかと思ひます」。当時仁鶴師匠が使つたフレーズで「カンボジアの皇太子」「文経師匠の「エチオピアの煙突そうじ」とはいつの頃からか言わはらんようになりました。

文太のむかし噺 ひ・貧乏花見

(その二)
長屋の連中が道中で一騒動しながらなんとか桜の宮へ。ヨメは人道中の腰巻、

男道中のふんどし、幔幕代わりに吊り簾の毛氈に座りチャカ盛り(酒盛り)を始めよつた。
「飲みや」
「ゴクゴク：いやー、喉が渴いてるよつてに美味いわ」
「酒らしい飲みいな」
「散ります、散りますええお酒でんなあ：渋口で。」
この酒は宇治でっか」

「こつとおもも食べや。どうや、サワラの子」
「おからでっしやる。それ食べたら目が赤うなって耳が伸びる」

(つづく)

文昇問題 その一

ちよつとラスベガスに行ってきた。仕事で行ってきた。ギャンブルは無し、交通費もホテル代も出ない。米国ネバダ州、南ネバダ大学内にあるホールで阿波踊りをして来た。総勢十七人、その内、噺家は學光師、岐代松師、そして文昇の三人。ついでに、落語も依頼された。逆ではないのか。持ち時間は三人で十五分。岐代松師と私が解説、學光師が古典落語をそれぞれ英語でやった。三人共、大爆笑だった。嘘だとお疑いの方には、学長の直筆サインの入った感謝状をお見せします。どこかの市長のようにチラ見せではなく、じつくりとお見せします。本当に、三人共爆笑だった。その中でも、特に、桂文昇は。

帰国してから、生活が苦しい。ベガスのカジノで散財したわけでもないのに、只今、ベガス貧乏中だ。お疑いの方がいるかもしれない。なに、全く疑っていない？米国に行く前から貧乏やったやろ。特に、桂文昇は。

「あやめの女王様とお呼び」

2026年は恒例でやってきた

「女芸人キャバレーナイト」が15周年を迎えます。

色んなジャンルの女ピン芸人が集つてそれぞれの芸を10分ずつ見せたり、組んでコントをやつたり歌つたり。落語会はこつちが演じお客さんを見るのみで飲食禁止、終わつたらサヨウナラですが、飲みながら気軽に見られてお客さんと乾杯もできる楽しいショーをやりたいと始めました。

最初のメンバーには女道楽の内海英華さん、浪曲の春野恵子さん、もいたけど色々移り変わって、今はものまねのめぐまりこ、昭和歌謡替歌のヴァチスト太田、エロリン漫談のツジカオルコ、足芸の曉あんこと私の5人です。

このイベントで出会つてずっと応援して下さる方もあるし、新しいお客さんも来るしネタも尽きませんが、15周年でラストの年にしようと思つてます。と、いうのも私も去年コケて手首折つたり顔打つたりしてるし、他のメンバーも足グネたり、老眼で歌詞が見えなかつたり：恒例イベントが高齢イベントになってきた！あと、結婚したら卒業という掟があるのに誰も卒業しそうにないし。
まだ見た事ないと言う御方、奇数月の最終月曜に独身女子がお待ちします。

坊枝の新婚日記

芝居にかぶれている次女の多福が四日間で六公演、東京恵比寿の小さな劇場での公演に出演するということを開き親バカの妻はすべての公演を観に行くと言う。

交通費もさることながら東京での三泊もの宿泊代は痛い。以前、東京の落語好きのKさんというご婦人が大阪に来られた時に「奥さん東京に来たらウチに寄ってね」と言っていたと妻はKさんに四日間のご自宅での滞在を頼んだ。単身上京し世田谷区梅丘の閑静な住宅地のKさん宅から四日間、恵比寿の劇場に通って帰阪した妻は「ああ楽しかった、Kさんの家の人も皆ええ人やわ」と嬉しそうに言った。私が「また寄ってね、とは言うてはったけど四日はアカンやろう、社交辞令やで」と言うと言った。皆様、妻にはお氣をつけ下さい。

楽珍の“警備員”日記

園田競馬場で警備した帰り、夜8時頃、公園のベンチに座りひとり落語の稽古をしていると…近所の誰かが通報したのであろう、目の前にパトカーが止まった。中から若い女性の警察官が近付いて来て、「おじいちゃん」と喋りかけて来た。

（はあ？……おじいちゃん？……ワシが？ おじいちゃん？……）
シヨックな言葉を言われて呆然としていると更に「おじいちゃん…ひとりでお家に帰れなくなっちゃったのかなあ？」

（え？……この警察官ワシの事、徘徊老人やと思うてんのかい？）と思った私は「イヤ！違う、違う!!そんなと違う!!」
と、即座に否定すると……
「ん……だよねえ……誰だって

最初はひとめたく無いもんねえ」
「いや、あのね、違うつて」と私。
「そうかあ……もうホンマの事言おう！」あのね、おまわりさん！
実は、私は、落語家なんです。
今、落語の稽古をしてたんです。」
「おじいちゃん……ウソついたらダメだよウソついたら警察に連れていかれるよ」と、ニッコリ笑って、私の手を引っぱって行つた。
昔、こういうプレイをするお店に行つた事を思い出した(笑)。

「枝曾丸のつれもていころ」

和歌山の名物が中華そばと云われて30年近く。当時、全国を震撼させた事件を始め、社会的な負のニュースが続いていた和歌山。東京のマスコミが長期滞在していた。記者たちがタクシーを貸切り、取材する際に運転手さんから知り「うまい！」と話題になった中華そば。すぐに全国ネットで紹介される事により今も続くブームとなっている。実家近くに地盤沈下で傾く変なラーメン店があった。どう考えても食べづらいし身体も倒れていく店内。しかしその珍しさ、店主の人懐っこさが相まって取材が殺到し瞬く間に全国区の繁盛店になったのを常連だった僕は間近でみていた。まだおばちゃんキャラが出来ていなかった若い頃の出来事でした。どこにもないものを創りたい」そう思つて始めた和歌山弁落語も少なからずこの店の影響だったと思う。そして漸家として続けてこれたのも、個性派揃いの我一門の先輩後輩が近くにいたからです。個性を存分

に出せる今年も励みます！

ぼんぼ娘。ピーのポンポコナー

一年の計は元旦にありという言葉を感じて毎年正月に願掛けをしては2月に忘れ、何もなしとげなまま年末を迎えるくりかえし。今年こそと願掛けしたはずなのになにもないまま2026年を迎えた。未来を変えるには、自分の行動しかないと言いつつも頭でわかっていても言い訳だらけで行動が起きない自分が情けない。

その点うちの師匠はすばらしい。昨年は昭和百年で六回目の年男。自分の当たり年だとまわりに吹聴し自分の独演会をやるだけではあき足らず、当たり年だからと、呼ばれてもない落語会に自分からゲストに立候補し出番を勝ち取る。願掛けだけじゃなく、まわりに迷惑を掛けまくって自分の目標を貫き通す。本当に、素晴らしい師匠だ。
ただ修行の足りない私は、師匠には今年こそ大人しくして欲しいと願掛けしている。

文福のおいちゃんストーリー

へ一年納めの九州の玄界灘に鳴りひびくやぐら太鼓やふれ太鼓、それよりおいしめたいこゝ昨年も博多の土俵に行きおかげさんで、年六場所生観戦(たのまれもせんのに…)今年もその目標がかげまっせー。

さあ、新年の初場所は大関、安青錦関の登場で楽しみでんなあ

。戦火で苦しむ母国ウクライナの方々に勇気と希望をあたえました。入門二年間、負け起しなし。新入幕から五場所連続二ケタ(十一勝四場所と十二勝)と連続三賞そして初優勝。まったくカベを感じません。彼の低くくさいさがるうまい相撲は私的に分析しますと彼の師匠は安美錦関その師匠は旭富士関その又師匠がああ北の湖輪島の「輪湖時代」の小兵の名大関旭国関。くらいついたらはなさない「ピラニア」そして研究熱心で「相撲博士」の異名をとったあの旭国関の相撲を継承していると思います。このまま一気に「目下開山」横綱になるか、ワクワクドキドキ。さらに初場所私的にうれしいのは、新十両の一意(かずま)関(木瀬部屋)。彼は大阪、港区出身ですが金沢学院高校、日本大学の相撲部でエリート街道まっしぐら。多くのタイトルをとり、一昨年年名古屋で幕下付出しデビューして四連勝、ところが五番相撲でヒザの大ケガで四場所土俵をはなれ、昨年五月の夏場所は序ノ口から再スタート、そこで実力発揮して全勝優勝。名古屋、序二段で六勝一敗、九月、秋は三段目で七戦全勝優勝して十一月の九州は幕下上位の十五枚目。ここで七戦全勝なら一気に関取(十両昇進)六戦全勝同志の相手は日本の一年後輩で、入門三場所目の竜翔、しかもご当所熊本宇土出身、大声援の中、見事一意が得意のつき押しで勝ち名のり、幕下優勝と十両昇進を決めました。思えば昨夏にお父さんが52才の若さで天に召されました。そんなつらい中、不屈の根性でつかみとった関取の座。日

大の同期はあの角界のニューヒーロー草野改め義ノ富士関、彼に追いつけ追いこせ。さらに感動したのは、一意関のお兄さんが元寺尾関の鍛山部屋で、幕下で引退した川淵。彼は今、亡きお父さんの「川淵工業」を継ぎ、社会人修行中。その兄が弟に夢をたくそうと、年末激励会を催した。私はその心意気にうたれて「お祝い」の「相撲甚句」や「河内音頭」のサービスをしたしだいなり。

編集後記

昨年もいろいろお世話になり、ありがとうございました。本年も当新聞ご笑読の程よろしゅうお願い致します。今号は4月末まであちこちでお目通り致します。

さて、昨秋、人情噺の名人、四代目桂福団治師匠が65周年記念の会を追頼堀の松竹座で催され「くっしやみ講歌」大爆笑「しじみ売り」でホロリと涙をさそう名人芸で満員のお客様も大満足。ゲストも二葉師、松喬師、鶴瓶師、南光師と人氣実力ともに充実の豪華陣。師匠は今年86才を迎えます。私たちもあやかりたいものですが我が一門の総領の六代文枝は今年83才、四代小文枝や文珍も70代半ばをすぎ後期高齢者の仲間入り。それでもまだまだ元気な現役バリバリ、この時期思い出すのは、一門の新年会の席上おやじ(五代目文枝)のごあいさつ、「今年も一門、兄弟仲良うせえよ！おめでとさんカンパニー」この金言を胸に今年も一門がんばりまっせー。皆さまご自愛下さい。
(文福)